

編 集 後 記

日本病院協定会款起草委員会及び創立準備委員会が5月12日に開かれた。Japan Hospital Associationを作りあげる準備を完了し、設立總會は来る6月24日盛大に舉行される。懸案がこゝでようやく實を結んだわけである。草分けの各地病院協會及び、この仕事を積極的にプッシュしてきた人にとっては感慨無量なものがある。病院の問題は今でこそ脚光をあびてたちあらわれたが、まだまだ爲すべき問題が山のようにある。むしろ開幕早々の期待と緊張から解放されて自由に問題の焦心にメスをいれるところまで病院協會がイニシアティブをとらなければならない。そのようにして病院管理學會も成立するであろうし、また病院協會自體のインターナショナルなつながりまでの發展も期待されると思う。

「病院」誌の使命も、いよいよその重要性を倍加したことを痛感する。雑誌「病院」の發展は、そのまゝ日本の近代的病院管理學史のコースの道標を示すものであつたのだが、こゝで一段と飛躍の體制をとりたいと思う。

本號は巻頭に守屋委員の「入院保険の提唱」をかゝげた。こゝで提起されたテーマは極めて示唆に富んだ新しいものであるが、これを中心に意見のある方はディスカッションに参加してほしいと思う。「病院」は廣く各方面に執筆の窓を開放しているオープン・システムである。

宮川米次博士は結核病床數の問題について、正に頂門の一針たるべき一文を寄せられた。劃期的な結核豫防法が施行されながら、なお問題が残され、特に病床の問題で豫算が削減された折から、極めて傾聴に値するものと思う。

「病院經理の理論と實際」の著者山元昌之氏の該博な知識に基く論文が本號から連載される。極めて分り易く執筆されたものであるから益する點が多いと思う。

河野醫務課長の連稿もまた、病院問題の核心をなす醫療機關整備の懇切な解説である。熟讀をお願いしたい。その他本號には、永い間もみ抜いたナースの制度の問題について看護課の解説をのせた。それと共に、大學病院改善がクローズ・アップされている折から、2回も學校指定をすべつた東大をとりあげて看護學校のルポルタージュをこゝろみた。

渡米中の尾村委員が元気で歸國した。歸國するや、息つく暇もなく出張つきで本號にはお土産話を掲載することが出来なかつたが、次號には豊富な歸朝話が寄せられる。御期待を乞う。

正 誤 表

4 卷 3 號 (3 月 號) 「病院管理見學ところどころ」中		
(頁)	(誤)	(正)
P. 4 (下より 10 行)	大體地階建	大體 4 階建
P. 5 (下より 3 行)	婦長藥局間に線なし	線あり
P. 6 (寫眞説明)	Bassl 乳製品會社乳兒院	パーセル市民病院
P. 7 (〃)	チューリヒ州立病院	ネッスル乳製品會社乳兒院
P. 8 (〃)	パーセル市民病院	チューリヒ州立病院
4 卷 5 號 (5 月 號) 「日本病院協會設立準備會」中		
P. 46 (上より 1 行)	日時 3 月 3 日	4 月 3 日